帯法について述べた。

26. ポリエステル（エポラック）製先天股脱装具の試作

成東病院　藤代国夫

先天股脱固定装具には従来より種々研究発表されている。演者も第2回本会席上発表した。今回更に改良を加え，乳幼児に対して，ポリエステル（エポラック）製のものを試作した。使用法は，原液，硬化剤，促進剤，調整剤の四者をフエルトにのし，ポリエチレン紙にて包み，身体各部の曲線に適合させる如く作製する。直接人体に接着させるも高熱感はない。その特長は①強く，軽く，②汚損され難く，③レ線も良く透し，④陽性モデル作製不要⑤製作時間は短く，⑥修理，接着等補習可能，⑦低廉，⑧引火性なく⑨可溶性一等である。尚本機試用によるも，体重の経過は全国平均で，下肢周径の減少等なく，発育上の支障はないと考える。昭和33年7月より試作し3例に施行して好結果を得た。

以上先天股脱に対してポリエステルの利点を充分に活用した固定装具であると考えられるのでその概要を報告した。

（製作担当　佐倉市　大昭化工　高石寿男）

27. 下顎骨折の1例

千大整形　石田三郎

27才：男性，交通事故により下顎骨の頤部と左関節突起に骨折をおこした。

頤部は当科来訪までに仮骨形成をおこし，大きな変形が認められなかつたので特別処置をせず，左関節突起部を観血的に鋼線固定術を行つた。術後，顎の変形はさほどよくならず，咀嚼力改善も大きく認められなかつた。X線では，術後固定部で軽度の骨折片の位置のずれが認められた。

下顎骨折は全骨折の約1.1%でその発生原因は交通事故が最も多く，年令では20才台が最高で，骨折部位も二重骨折の場合では頤部と関節突起部の合併は二重骨折中の約24.9%に見られ，二重骨折そのものが少くないので，本例は下顎骨折としては珍しくないといえよう。

下顎骨骨折の場合，他の骨折と同じくいわゆる咬筋諸筋の牽引力による骨片の転位が見られる。本例にもそれが認められた。

治療に関しては関節突起部の骨折の場合，非観血的方法による固定が困難なので，観血的鋼線固定法適応と思われる。しかしその場合術後に於いて上記の筋牽引力の影響を除去する何らかの方法が講ぜられるべきであろう。

28. 陳旧性橈骨小頭脱臼の1例

千大整形　林　国春

外傷後4年にして，手指の伸展障害及び肘関節の変形を主訴として来院し，精査により，先天性尺骨欠損を伴なう陳旧性橈骨小頭脱臼による指伸筋の変性萎縮を生じた一例に，浅指屈筋の腱の尺側の一部を指伸筋の腱に縫合，次に腕橈骨筋の腱の一部を長母指外転筋に縫合した。

術後2週を迎え，筋力恢復の兆候ある1例を報告した。

29. 弾撥股の1治験例

千大整形　高石　敏

外傷に由来するものと考えられる弾撥股の1例を経験し，手術的に治癒せしめ得た。

症例：18才，女子，ウェイトレス。主訴：股関節の異常音と倦怠感。家族歴，既往歴に特記すべきものなし。現症歴：約1年前転倒後半年で左股関節部に異常音と倦怠感を生ず。全身所見に特記すべきものなし。局所所見，股関節の運動時に母指頭大の硬結を大転子部皮下にふれ移動と共に雑音あり，股関節の運動制限はない。レ線所見，尿，便に異常なし。「ツ」反応は陽性。試験穿刺は陰性。手術所見：腸脛靱帯に一致し，その深部に瘢痕性硬結物あり，これを除去，靱帯の延長を計る。組織所見：確結部より得た切片は瘢痕性組織を示す。遠隔成績：8カ月半現在，股関節の運動時に異常は認められない。

30. 興味ある2，3の外傷治験例

蘇我病院　木村保之

最近経験せる興味ある外傷の治験例について述べる。第1例は20才の男子の外陰部の完全なる皮膚剝離で治療に当惑したが大腿及び陰部にトンネルを作り，Penis 及び Hoden を埋没して前後6回に亘る整形手術の結果治ゆせしめた症例で，約3カ月を要し治ゆ後生殖力の消失を示したが機能に支障はなかつた。

第2例は重症なる頭部外傷によつて起つた言語障害の1例で21才男子，左側頭部の開放骨折で約3週間意しきの恢復が見られなかつたが観血的整形術